

社工フォーラム「社会工学の源流・DNA を探る会」～道家達将先生を囲んで～

■日時：2019年8月7日 14:00～16:20

■場所：東工大百年記念館土光記念応接室

■出席者：道家達将東工大名誉教授(人文担当＝科学史)、
岡田大士中央大学法学部教授(和田小六による東工大改革を研究)
社会工学科OB：岡部聰、野木政宏、佐藤年緒、佐野郁夫、小林清、大村哲弥、
栗橋寿、室田哲男

■道家達将先生の話のポイント

<永井道雄先生、川喜田二郎先生について>

- ・ 「社会工学」とはうまい言葉だが、永井先生の命名かもしれない。永井先生は米国に長くいたので、米国の技術教育などについてよく話をした。当時は大学紛争のため、(部屋でというより)、道路の上でよく話をした。
- ・ 川喜田先生とは主に国内の話。(移動大学の)テントの中で話した。
- ・ 川喜田、永井先生は仲良かった。2人は獅子奮迅。学生と大学との間に立っていた。
- ・ 2人は大学の中では、傍流だった。大学紛争も重かった。2人が大学を辞めると聞いたときは、「なぜやめるのか」と私が怒ったことを思えている。



道家達将先生

<社会工学科の創設期について>

- ・ 物理や化学などは学ぶことが決まっていて、学生も変わったことをやろうとはしない。社工の学生は教授陣に、批判を含めて鋭い問い掛けをする。つかかかのように、厳しい言い方をする。学生は将来を掛けているのだから(当然だろう)。社会の問題、何を学ぶべきかなど。大学側も考えざるを得なかった。学校側もたじたじであった。
- ・ 東工大の中で、社工はいじめられていた面がある。社会工学は「特殊」という気持ちがあった。他の学科にはtextがあったかもしれないが、社工にはなかった。カッコよく体系づけられていない。Textを毎回作っては変えていく。それでも、いきいきしていた。古典的な仕組みはない。
- ・ ずい分いろいろな議論をしたが、議論は常に新しく、つかみどころがない。議論をして、

解決しながら研究成果を上げていく。決してきれいな形ではなかった。苦しみながら開拓していた。

- ・ 東大に都市工ができた直後に、社工が誕生した。二番煎じではなく、社工の方がもう少し広い分野を扱っていた。

<社会工学科と数学>

- ・ 社会工学でも数学に強い先生が何人かいた。数学の理論は社工とは関係なさそうだが、重い位置付けだった。東工大の中でも、社工の数学は存在感があった。
- ・ 経営学は数学が前提。数学に強いのは他の大学から脅威にみられている。東大よりも優れている。それは「誇り」でもある。もっとも昔、数学がある時期おかしくなって、理学部のなかで嫌われていったこともある。
- ・ 鈴木光男先生は、数学、経営の理論でもおもしろい人だった。社工的な境界領域における数学の理論問題を発展させた。矢野先生は、統計を教えていた。熊田先生は、なかなかのやり手だったが、粗っぽい面があった。阿部先生は落ち着いていた。
- ・ 東工大の各学科はそれぞれある種のバランスをもっていたが、社工は少し違っていた。

<大学全体から見た社会工学科>

- ・ 大学は生き物。大学の中で社工の置かれている地位にも波がある。当初は、大学全体の中でも重い位置付けで、教員集団も皆からうらやましがられていた。その後は何が起こったのか？
- ・ 大学全体で経営をしていくときは運営の力が必要。東工大を動かしている人はだれか。人脈のなかで人への影響力は大きな意味がある。川喜田、永井先生は派手に見えるけど、(その点からは)力はなかった。(有力)ポストも就かなかった。大学運営からは力がな



道家先生を囲んで

かった。

- ・ 普段は見えないが、教員集団にはリーダーがいる。現役のときは気づかなかったが、あとで分かったが、川上正光学長（1973年～1977年）はマネジメントをよく考えていた。信頼されていた。私も昔は彼を威張っている人としか見えなかったが、マネジメントの力はある。社工の存在や位置づけにどのくらいの力をもっていたかはわからないが、何らかの影響を与えていたと思う（見えない形で動かしていた）。家が近くで、話すようになって、最後は、自分の書いたものだと、博物館に渡され、書かれたものを読んで、人物を理解した。

<これからのこと>

- ・ 皆さんは「夢」をもった研究集団をつくってください。社会工学は、社会的には有用なことをやってきたのだから、ここで「さよなら」でなく、育てていくことができる条件を整える。「夢」「願望」を持つのは間違ったことでない。教育は夢を持つことが大事である。この会も「社会工学」の再建につなげてほしい。
- ・ 元学長の末松、伊賀の両氏と博物館の広瀬先生は信頼できる方なので頼りにしてほしい。

■岡部聰氏（第2代社工会会長、1971年卒）の話のポイント

- ・ 当時、道家先生は八杉先生の下にいた。社会の問題を解決する社会工学が来年度にできるというので、私は1期生として社工に進んだ。高度成長のひずみを工学的に治すと言っていたが、カリキュラムは寄せ集めで、方法論が分からない。各先生に会って聞けば、ある人は土木、ある人は経済学と、自分の中心基盤の中からものごとを考える。では何を学ばばいいのか、概念として問題解決というものがあったが、方法論はなかった。
- ・ 川喜田先生は「参画社会をつくろう。教える者、教えられる者という、一方通行でない社会」を目指していた。大学では、学園紛争で学生運動のグループと教授会がしっくりいかなかった。間に立った川喜田先生も学生から突き上げられた。その際、川喜田先生は「移動大学をつくろう。それには二足の草鞋ははけない。東工大を辞める」と言ったら、永井先生も「私も辞めます」と続いた。
- ・ 当時の社会現象でもあったけれど、学生にはフラストレーションがたまっていた。大学もすぐに答えを出せない。永井先生は、組織的に変えようと政治の世界に出て行った。社工が社会問題を解決するという概念だけで、方法論はない。アカデミズムでは何かを誰も答えてくれない。それが永井、川喜田先生は不満だったのではないか。そのまま50年経って、今回解散になった。



左より、岡部氏、道家先生、室田氏

- ・ いま私は事業構想大学院大学の教授として教えているが、社会工学と似ている。こちらでも現実社会の解決を目指すのが、原理原則はあっても、数式で表現したり、作業手順をマニュアル化したりすることができない。現実社会だから、一期一会であり、再現性がない。共通性があるようでない。人に説明しにくい。体系的なロジックを持ちにくい。現場に、ひとつひとつの個別事例に引っ張られる。
- ・ 社会工学も同じで、阿部先生も含め、関係者は苦労したと思う。旧来的なアカデミズムの普遍性がなく、いまだに説明しにくい。大学としては、一つの出口として、社会工学のセンターのような総合コンサルの事例研究所をつくる。事例を積み上げていくうちに、普遍性や問題解決の法則性のあるものを見つけるようなものが東工大にあるといい。
- ・ トヨタにいて、これからの自動車はますます異業種のコラボが必要になってくる。機械や電気との関係のほか、建設土木でインフラをどうするかなど、さまざまな分野とコラボがますます求められるわけで、社会工学みたいな人材が必要。が社会的に重要になってくる。

(了)